

考えを正しく伝える子どもを育てる中学年国語科書くことの指導

所属機関 福津市教育研究所
所属校 福津市立福間南小学校
職・氏名 教諭 七田美恵

1 主題設定の理由

(1) 児童の実態から

下の図 は書くことへの意欲と技能に関する本学級児童の実態調査結果である。

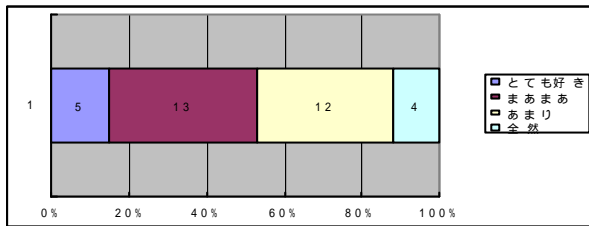


図 : 書くことへの関心・意欲

図 から約 5 割の児童が書くことに抵抗があることが分かる。その原因として何をどう書いてよいか分からない、といった技能的な要因を挙げている。

また書くことの評価問題を作成、実施した結果主題にそって材を選んだり構成したりする技能に課題があることが分かった。

これらの結果から書くことへの意欲、技能とも十分に定着させきっていないこと、意欲と技能の定着は関連していることが明らかになった。そこで意欲と技能を相互に高め、書く力を確実に身につけさせたいと考え本主題を設定した。

(2) これまでの指導の反省から

前長崎大学教授安河内義巳氏によると、作文過程には : 文のもとになるもの(思いや考え)を生み出す指導の段階、 : 文を生み出す指導の段階、 : よりよい文に高める指導の段階があるという。

これまで書くことの指導にあたって私は、と の段階に力を注いできた。

の段階では他教科や学校行事での体験を題材化したり取材ノートを工夫したりしながら書くことへの意欲を高めようとした。

の段階ではとにかく個別指導を徹底し誤

字脱字をはじめ表記に関する指導を徹底してきた。しかし「文を生み出す」の段階の指導、すなわち言葉を構成する指導が不十分であった。このことが図 に示した書くことへの意欲や技能の実態と直結している。そこでこれまで以上に言葉を構成する場面に力を入れて学習指導する必要があると考え本主題を設定した。

2 主題の意味

ここで言う考えとは他教科や領域の学習や学校行事で見聞きしたり調べたりしたことから生じる紹介、説明内容の一まとまりである。

考えを正しく伝える子ども像を私は大きく次の二つの資質・能力からとらえている。

一つは書くことへの関心・意欲。是非とも書きたい、書いて伝えたいという書く前に意識・自覚する期待感と、書いてよかった、伝わって嬉しいといった書いた後に意識・自覚する満足感その内容である。

もう一つは書くことの技能。中学年では、とりわけ「自分の考えが明確になるように、段落相互の関係を考える」という構成の技能、「書こうとする事を中心を明確にしながら、段落と段落との続き方に注意して書く」という記述技能が必要である。

書くことへの関心・意欲と技能、この二つの資質・能力が下の図 のように相互に関連し合い高まったときに目指す「考えを正しく伝える子ども」が育つと考える。

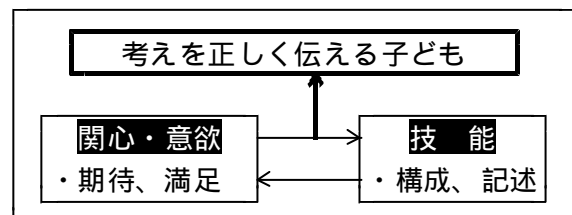


図 : 考えを正しく伝える子ども

3 研究の仮説

中学年書くことの授業づくりにおいて、体験をもとに考えを書き表す過程において以下の手だてを工夫すれば、考えを正しく伝える子どもが育つであろう。

題材をかえた繰り返しの作文活動のある単元構成とすること【仮説】
作文の全体を見通し、書く事柄の順序接続関係をとらえることのできる構成モデルを示すこと【仮説】

4 研究の内容

(1) 題材となる体験の開発と書く場の設定
書くことの学習においてまず大切になるのは題材の開発・選定である。子どもが書きたくなる、書かずにはおれないとなるために次のような条件にそって学習体験を題材として開発・選定する。

条件1：共通体験であること

例えば学習や学校行事で見聞きしたり調べたりするといった共通の体験を題材化する。このことによりどの子にも書く内容を保障し共有することが期待できる。

条件2：継続体験であること

例えば一日で終わる遠足よりも動植物を育てたりモノをつくったりするといった継続の体験を題材化する。このことにより伝えたい事柄が多量多様になることが期待できる。

条件3：納得体験であること

疑問を持ったことについて観察したり調べたりして答えを見つけ出すことができるような納得の体験を題材化する。このことにより中学年書くことの学習内容である中心や段落と段落の続き方を強く意識することが期待できる。

(2) 体験と作文活動を連動し繰り返しのある単元構成【仮説】

書くことの技能は書くことにより身に付く。したがって書く意欲をつなぎつつ書く活動をいかに多く設けるかが大切になる。そのため私は書くことの単元を

体験と作文活動を連動すること

題材をかえて繰り返し書く場を設けること
の二点にポイントをおいて下の図のように構成する。

課題をつかむ段階
・書く目的、相手、内容の確認
正しく伝える力を高める段階
共通題材で 個別題材で
満足を共有する段階

このような構成により子どもは書くことへの意欲を連続発展させながら中学年書くことの技能を単元の学習の中で確実に身につけることが期待できる。

(3) 作文の全体を見通し構成をとらえることのできるモデルの開発【仮説】

書くことへの意欲と技能、とりわけ構成する力を高めるためには、何をどこに書くのか、作文活動全体の見通しを持たせることが大切になる。そのため私は大きく次の二つのモデルを提示する。

ア 作文全体の構成と内容を大まかにとらえさせるための「モデルノート」(下図)

3 ページ	2 ページ	1 ページ	表紙
・接続語	・事実	・事実	
・意見			

図：全体構成をつかむモデルノート
モデルノートの形態としては本やリーフレットなどいくつか考えられる。いずれにしても調べたり見聞きしたりした事実を2～3つとそこから生じる感想や意見を1つのページに示すことにより子どもがまとまりとその内容、順序を意識し思考することが期待できる。

イ 段落と段落との接続関係を確実に理解させるための「モデル文」

事実 と事実、事実と意見の接続関係について順接、逆接、並列、添加などのモデルを示し、適切か否かを思考、判断する場を設ける。

5 研究の実際

(1) 単元

第4学年「リサイクルブックをつくろう」

(2) 単元の概要

本単元以前に子どもは事実と事実を「また」といった並列や「そして」といった添加の接続語で関係づけて書く技能を身につけている。これをふまえて本単元では「だから」「それで」といった順接の接続語で事実と意見をつないで書く技能を身につけさせる。

題材として採り上げたのは総合的な学習の時間の廃油石けんづくり体験。これは共通、継続の学習体験であり「なるほどこんなに簡単に、だれでもリサイクルできる」といった納得を得られるためこの期の書くことの題材としてふさわしいと判断した。

(3) 授業の実際

ア 書くことの課題をつかむ段階

この段階のねらいは「リサイクルブックをつくって学級や学年の友達に読んでもらおう」という課題をつかみ書くことへの関心・意欲を高めることにある。そのため作文全体の構成と内容を大まかにとらえさせるための「モデルノート」を提示することにした。

【仮説】

はじめに総合的な学習の時間での廃油石けんづくりを写真や見学ノートをもとに振り返りながらリサイクルの大切さや方法を他の友達に伝えたい、伝えなければという思いを確認した。その方法として、教師が作成した「リサイクルブック」をモデルノートとして提示した。(写真)



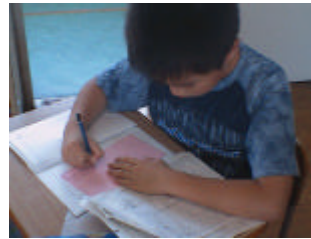
写真：リサイクルブックを説明していった。

イ 考えを正しく伝える力を高める段階
この段階のねらいは「リサイクルブック」に調べた事実とリサイクルをすすめる意見を「だから」「それで」といった順接の関係

でつないで書くことにある。そこで段落と段落との接続関係を確実に理解させるための「モデル文」を提示することにした。

【仮説】

はじめに「リサイクルをするのに廃油石けんづくりをおすすめします」という共通の意見を確認しピンクの意見カードに書き込んでいった。(写真)



写真：意見を書くA児
「いいですか、と問いかけると「おすすめの理由を書きます」と子どもたち。だれでも、簡単に、環境にやさしいといった廃油石けんづくりのよさを確認して下の写真にようなモデル文を提示した。

書き終えた意見カードはリサイクルブックの3ページ目に貼り付けさせた。前のページには何を書けばよ

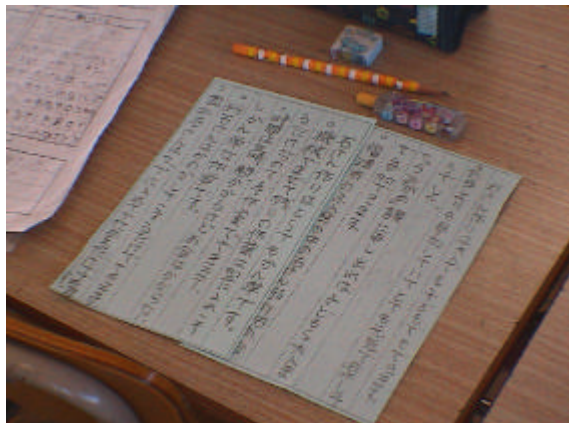


写真：事実と意見を順接でつなぐモデル文

まずピンクの意見カードと青の事実カードを「ところが」「でも」という逆接の接続語でつないで提示する。「なんかおかしい」「つながらない」という子どもたち。ではどんなつながり言葉なら赤と青につながりますか、と問うと「それだから」「だから」という接続語が出された。そして「だから」という接続語は前後のまとまりを矢印()でつなぐはたらきがあることを確認した。

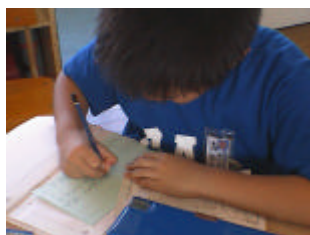
この後子どもたちは見学カードをもとに青の事実カードに簡条書きで書き込んでいった。

こうして下の写真のように大きく二つの事実のまとまりを書いた子どもたちは「リサイクルブック」の2、3ページ目に貼り付けていった。



写真：廃油石けんづくりのよさのまとまり

共通の題材である「廃油石けんづくり」に関する「リサイクルブック」が出来上がった。そこで教師から「続きのページに今度はみんなのおすすめのリサイクルを書いてみましょう」と提案した。「たまごパックで紙粘土づくり」など、おすすめするリサイクルやそのよさは異なるが、二つの事実と意見を「だから」という順接関係でつないで書くことは同じである。このような単元構成で技能を定着をねらうのである。【仮説】



写真：事実を進んで書く A 児たちはぐんぐん書き進めていく。(写真)

こうして子どもたちは廃油石けんづくりに加えて自分のおすすめのリサイクルを書き加えて「リサイクルブック」を完成させることができた。

(3) 書くことへの満足度を共有する段階

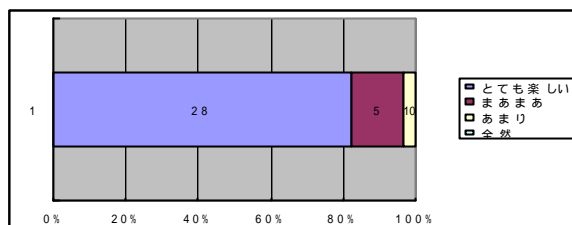
でき上がった自分の「リサイクルブック」を読んだり読み合ったりしながら満足感いっぱいの子供たち。「隣のクラスの さんに読んでもらおう」「持って帰ってお母さん

に読んでもらおう」思い思いの相手に「リサイクルブック」を手渡した。

6 研究のまとめ

(1) 考えを正しく伝える力の定着について

下の図は「リサイクルブックづくり」に対する満足度を単元終了後に自己評価したものである。



図：リサイクルブックづくりへの満足度

8割以上の児童が満足を感じている。その理由として「本づくりが楽しかった」や「だからを使っておすすめ理由がうまく書けた」といった活動そのものや技能の高まりに関するものをあげていた。

また、「だから」「それで」といった接続語を使った短文づくりに関する評価問題を作成、実施した結果、約9割の子供が順接関係を理解して文章を書くことができていた。

以上のことから本単元に関しては書くことに関する関心・意欲と技能が身に付いている、すなわち主題でめざす「考えを正しく伝える子ども」が育っていること、そのための手だてとして工夫した仮説は有効であったと判断している。

(2) 今後の研究の方向について

単元レベルでなく年間を通した意欲と技能、手だての有効性の検証が必要である。そのためには学習内容を明確にして他教科との関連性と中学年の系統性をふまえた指導計画を整備することが課題である。

その際、「モデルノート」や「モデル文」の内容や提示の仕方も題材やねらいに応じて多様になることが予想される。これらを束ねてモデル活用の在り方をまとめ一般化し日常の授業にも活用できるようにしていくことが課題である。